

西洋文学における変身のテーマ

青山, 太郎
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5335>

出版情報：言語文化論究. 5, pp.47-56, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：



西洋文学における変身のテーマ

青 山 太 郎

1

「西洋文学における変身のテーマ」というのが与えられた講義題目ですが、先ずはじめに、ここで言う「変身」の意味を定義しておきたいと思います。

変身と言う場合、大雑把に言って、内面的な変身と外面的な変身が考えられます。内面的な変身というのは、人間が内面的に、つまり心理的・性格的・精神的・思想的等々に変ることであり、近代小説の殆どは人間のこうした内面的な変化を扱うものであると言って、さしたる誤りはありますまい。いわゆる教養小説 Bildungsroman などはその典型であって、主人公が人生のさまざま試練を経ることで人間的に成長してゆく、その発展過程を辿るものです。

それに対して外面的な変身というのは、人間が文字どおりその姿形を変えて、動物・植物・あるいは鉱物に変身する場合があります。これには、変身するのが人間ではなく神々であったり、あるいは逆に、動物・植物・鉱物等が変身して人間になったりする場合がありますが、いずれにせよ主人公は文字どおり変身するのであり、その際外面的には変身しても、内面的には変らない場合が多い。今この講義では「変身」をこの後者の意味、つまり外面的な姿形の変容という意味に限ることにします。

そこで、西洋文学における変身を扱った作品というと、古代から現代までさまざまな作品が思い浮かぶわけですが、先ず題名そのもの

からして「変身」と題されたものといえば、ごく常識的に言って三つの作品が挙げられます。オヴィディウスの「変身物語」、アプレイウスの「変身譚」、それとカフカの「変身」です。このうち現代作品たるカフカの「変身」については、別の先生が講義されることになっているのでここでは省略し、オヴィディウスとアプレイウスから話を始めることにします

オヴィディウス Publius Ovidius Naso は、紀元前一世紀の中頃に生れ、紀元17年に死んだローマの詩人です。紀元前一世紀後半といえば、アウグスチヌス帝の即位によりローマは帝政に移行し、またヴェルギリウスとホラチウスという二人の大詩人が相次いで世を去った時代です。オヴィディウスの代表作としては「恋の技」Ars amatoria 三巻と、「変身物語」Metamorphoses 十五巻が有名です。紀元8年、詳しい事情は不明ですが、アウグストゥス帝により首都ローマから、当時の僻遠の地黒海西岸のトミス（現ルーマニアの港町コンスタンツァ）に流され、ここでローマへの帰還を願いつつも叶わず、流謫の身を嘆きつつ世を去りました。

「変身物語」は岩波文庫の訳では散文訳になっていますが、本来これは、ギリシア起源のヘクサメトロスという詩型で書かれた韻文作品です。内容は、ギリシアの神話伝説から変身に関係のある話を集めたもので、作者の博識はこの作品をギリシア神話の一大集成としています。物語そのものはギリシア神話ですが、そこにこめられた心理や恋愛感情は、

当代ヘレニズム風の甘美な屈折した趣きを有し、この点で本来のギリシア神話の精神を歪めていると苦言を呈する学者もいますが、その口当りのよさもあってか、中世近世を通じて非常によく読まれ、文学や美術の題材の宝庫となりました。こんにちわれわれがギリシア神話として知っている物語は、いずれもオヴィディウスに発していると言って過言ではありません。

そこで問題は、ギリシア神話における変身のテーマということになりますが、先ず目につくことは、当然のことながら、ギリシア神話にあって変身したり変身させたりすることは、専ら神々の特権であるということです。いろいろな変身があります。ユピテル（ゼウス。ギリシア神話とはいえラテン語で書かれた作品ですので、神々の名はローマ名になっています）自身、大王アゲノルの娘エウロペを掠うため牡牛に変身したり、妻ユノーの眼をごまかすため愛人イオを牝牛に変身させたりします。概して、神々の怒りに触れ罰として変身させられる話は非常に多い。カドモスの孫アクタイオンは、女神ディアナの入浴する姿を見て鹿に変えられ、リュディアの平民の女アラクネは、女神ミネルヴァと機織りの技を競って蜘蛛に変えられてしまいます。それとは逆に、褒賞としての変身の話もあります。或時ユピテルとその息子メルクリウスが人間に姿を変えて、プリュギア地方を訪れたことがある。憩うべき宿を求めて多くの家々を訪れますが、どの家も旅人たちに門を閉ざします。そのなかで、ピレモンとバウキスという貧しい老夫婦のみが旅人たちを迎え入れ歓待しました。不信心者たちが皆滅ぼされたのちも、敬虔な老夫婦は神殿の守番となり、死後は神殿の傍に隣合う樅と菩提樹に変身します。また、自らの思いが凝って変身をとげる話も多々ありますが、その場合は何らかの形で神々の力が介入してくることが多いようです。7人の息子と7人の娘をもっていた

テーバイの王妃ニオベは、このことを2人しか子供のない女神ラトーナに向って誇ったため女神の怒りを買ひ、女神はアポロンとディアナに命じてニオベの息子と娘たちをすべて殺させます。ニオベは悲しみのあまり石と化します。河神ペネイオスの娘ダプネは、アポロンに恋され追いかけられますが、これを嫌い、アポロンの手が将に及ぼうとした瞬間月桂樹と化してしまいます。木魂のニンフであるエコーは、河神ケピソスの子で美少年のナルキッソスに恋しますがはねつけられ、悲しみのあまり痩せ細り、とうとう体は枯渇し、骨と皮どころか声だけになってしまいます。いっぽうナルキッソスは、水に映った自分自身の姿に恋し、もはや水辺を去ることができず、とうとう黄水仙と化します。このように植物や動物の由来を物語る話は、ほかにも沢山あります。

岩波文庫の訳者解説によると、この「変身物語」の理論的根拠ともいうべきものは、ピタゴラスの輪廻転生説であろうとのこと。魂はあちこちと移り行き、獣から人間の体へ、人間から獣へと移り、決して滅ぶことがない。靈魂は常に同じものでありながら、いろいろな姿の内へ移り住む、というわけです。ピタゴラスは紀元前六世紀の人で、小アジア西岸イオニア地方のサモス島の生れです。ギリシア人によるイオニア地方の植民都市は、ギリシア本土に先立って早くから交易により富み栄え、とりわけミレトス市はギリシア哲学発祥の地とされます。ピタゴラスはイオニア学派のタレースやアナクシマンドロスの教えを受けたと言われ、またエジプトへ旅行し、エジプトの神官たちからも学んだと言われます。またバビロニアへも行き、ここでゾロアスターに会ったという伝説もありますが、これはあんまりあてになりません。ピタゴラスはその後イタリアへ赴き、半島南端近くのクロトンという都市で独自の道徳的・宗教的教団を組織しました。ピタゴラス自身は何も

書き残さなかったようで、こんにちピタゴラスの教説として知られるものは、この教団に属する彼の直接間接の弟子たちにより伝えられたものです。ピタゴラス学派の根本思想は、万物の本質は数であるというもので、それゆえこの派の人々は皆数学者であり、また天文学や音楽に通じていました。これら学問や技芸の根底にあるものは、やはり数の理念であるからです。また、ピタゴラスは前世の記憶を有していたと言われるところから、人間の魂は本来神々と共にある不死の存在なのだがこの世では肉体という檻に閉じ込められており、肉体の死と共にここから分離して冥府へ行き、ここで浄化され、再度他の肉体へ入るのであるという、ピタゴラス学派の靈魂観が生まれたもようです。プラトンの想起説は、ピタゴラス学派の輪廻転生説に多くを負っています。

2

アプレイウスの「変身譚」に話を進めます。オヴィディウスの甘美な世界と違って、これはもっと生臭い世界です。

ギリシア文学において、散文は韻文より遅れて歴史・哲学・雄弁術の分野で発達しましたが、紀元一世紀頃から、純粹に娯楽的読物としての散文小説が成立します。このギリシア小説というのはいずれも恋愛小説で、相思相愛の男女が別離ののち、数々の艱難を経て再会するといった筋立てのものです。概して登場人物は無性格で社会性を欠き、風俗描写もないので、物語の時代や場所を特定できないのが普通です。それに反し、ギリシア小説とほぼ同時代に成立したラテン小説には、風俗描写があり、人物や時代の描写も適確で、物語としての信憑性に富んでいます。こんにち現存するラテン小説としては、一世紀中葉のペトロニウス作「サティリコン」と二世紀中葉のアプレイウス作「変身譚」があります

が、これらはいずれも現存のギリシア小説(ロンゴス作「ダフニスとクロエー」が岩波文庫に入っています)より古いものです。ペトロニウスの「サティリコン」は、イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニが1969年に映画にしています。いかにもフェリーニらしい作品で、盛期ローマの猥雑で絢爛たる頹廢の雰囲気が見事に映像化されていました。

アプレイウスの「変身譚」ですが、これは別名「黄金の驢馬」とも呼ばれている作品で、主人公のルキウスが見様見真似の魔法で鳥に変身しようとしたところが、薬を間違えて驢馬になってしまいます。薔薇の花を食べると元の人間に戻れるのですが、たまたま薔薇の季節ではないので当分は驢馬のままでいなくてはならず、その結果いろいろ苦勞を嘗めることとなります。主人公は驢馬となることで、並の人間には知ることのできない社会の裏面に立会い、ここにローマ時代のおどろおどろしい世界が描き出されます。主人公は最後には人間に戻り、エジプト起源のイシス女神信仰に入信して浄らかな生活を送ることになりますが、この信仰は作者アプレイウス自身の信仰でもあったもようで、この人は北アフリカの出身です。アテネやローマに遊学し、法律と弁論を学ぶと同時に詩文の腕を磨き、後年はカルタゴに安住し、法律家・文化人として活躍しました。「変身譚」のほかにも若干の著作が残っています。

オヴィディウスのギリシア神話はなにぶんにも神々の世界のことで、変身はこの上なく容易であり、そのための特別な術などは必要としませんでした。アプレイウスとなると、これは小説であり、人間臭い俗世の話ですので、ルキウスは変身するには魔術に訴えなくてはなりません。概して、この作品全体に亘って魔術への関心は至るところに現われており、このことは、作者の信奉する宗教がイシス女神信仰というエジプト起源の宗教であったことと無関係ではありますまい。ここにあるの

は、さまざまな自然宗教と魔術の、未分化状態というべきものです。紀元二世紀のローマは宗教的にすこぶる寛容であり、一方にローマ神話に基く固定宗教があれば、他方に地方の土着の宗教や東方から流れ込んだ外国の宗教がある。例えば「変身譚」で言及されているものだけを挙げて、プリュギア（小アジア北部）起源のアッティスとキュベレ、トラキア（ギリシアとブルガリアにまたがる地方）起源のサパーディウス、ギリシア起源のディアナ、アドニス、ローマ起源のヴェヌス、ヴェローナといった神々が入り乱れ、混合し同化し合い、宗教的無秩序の観を呈していました。因みに、エジプトのイシス信仰やギリシアのディアナ信仰といった地母神信仰は、のちのキリスト教時代に聖母信仰と習合して民衆の中に生き続けることとなります。二世紀半ばにはキリスト教も未だ新興宗教の一宗派にすぎなかったわけで、神は一つしかないと主張するこの宗派は、良識あるローマ市民の眼に、荒唐無稽な教義を奉ずる狂信者の一団と映っていました。ローマ時代のこの精神的無政府状態には、拠り所となる精神的権威を喪失した現代と通ずるものがあり、フェリーニをして「サティリコン」の映像化を思い立たせた理由も、このあたりに存すると思われま

3

古代から中世へと時代が移るに従い、ヨーロッパの精神風土には著しい変化が生じます。ローマ帝国では四世紀はじめコンスタンチヌス帝によりキリスト教が公認され、四世紀末にはテオドシウス帝により国家の宗教となり、それ以外の宗教は異教として禁止されます。以後キリスト教は着々教会制度を整備しつつ、ローマ帝国の版図内はもちろんのこと、その外にも布教を及ぼし、異教との戦いを精力的に推し進めます。

キリスト教は単一の超越神を崇める一神教

であることにより、その母体となったユダヤ教と共に、古代の諸々の自然宗教とは著しい対照をなしています。自然宗教の根底にあるのは自然崇拜です。人々は大地を崇拜し、大地に潜む豊穰神を崇拜し、樹木を崇拜し、岩石を崇拜し、太陽を崇拜し、諸々の星辰を崇拜しました。古代人にとって自然は生きていたのであり、精霊に満たされた存在でした。森羅万象が多様であるように、自然宗教の神々は多様です。しかるにキリスト教の神とは唯一無二であって、自然の森羅万象を超えたものです。この唯一の神こそがこれら森羅万象を創ったと認め、この神を崇めることは、その被造物である自然を崇めることと両立しません。以後星は星、樹木は樹木、石は石にすぎないものとなる。自然を満していた神々や精霊たちは、偶像としてその玉座から逐われることになる。「大いなるパーン（牧神）は死せり」という有名な文句は、超越的な唯一神の出現による古代の神々の死を意味すると解釈するのが妥当でしょう。キリスト教は自然を精霊の支配から解放することで、自然から魂を抜き取り、自然を機械化したわけで、これにより科学的な自然研究への道を開くこととなります。言い換えればキリスト教は自然を殺したわけで、その意味で、近代の自然科学を準備したのはキリスト教です。われわれは普通、科学と宗教は両立しえないと考えることに慣れています。地動説を唱えたガリレオが、教会の圧力で自説を否認せざるをえなくなりますが、やはり承服できないで「それでも地球は動く」と呟いたとか、神は諸々の生物を類として創ったという聖書の記述に反するというので、ダーウィンの進化論が教会の攻撃を受けたとかいう話は、よく知られています。科学と宗教が歴史上絶えず衝突を繰り返してきたのは事実です。しかし、キリスト教による自然の機械化なくして近代の実証科学がありえなかったというのは、より深い事実です。キリスト教と近代の合理主義的

実証主義精神は、おそらく、それほどかけ離れたものではないのです。「大いなるパーンは死せり」とは、古代世界の終焉とキリスト教世界の開始を告知する言葉でした。とはいえ、古代の神々や自然の内なる精霊は、キリスト教の到来によって直ちに息を引き取ったわけではありません。或る時代の宗教の神々は次代の宗教の魔神（デーモン）であるというのが、宗教史の常識です。キリスト教により邪悪なデーモンとして歴史の表舞台から放逐された古代の神々や精霊は、地下へもぐり、伝説や民間伝承や魔術や俗信の内に生き続けることとなります。例えば古代の地中海世界には、ギリシアのデメテル、アフロディテ、アルテミス；ローマのディアナ、エジプトのイシス、メソポタミアのアスタルテ、ブリュギアのキュベレといった地母神信仰が存在していましたが、キリスト教によって逐われ、のちの魔女の形象へと流れ込むこととなります。他面では、母神崇拜が聖母崇拜へ流れ込むことも前述のとおりです。ギリシアの神々や近東の女神たちばかりではありません。ケルトの神々、ゲルマンや北欧の神々についても同じことが言えます。ドイツの詩人ハインリヒ・ハイネに「流刑の神々」という美しい文章があります(岩波文庫)。キリスト教の勝利により権力の頂点から叩き落され、今や地上の古い神殿の廃墟や魔法の森の暗闇の中で、つまり民間信仰の中でしか生きることを許されなくなった古代の神々について、ハイネは見事に語っています。

話を変身にに戻しますと、変身がありうることを信じられるのは、やはり、輪廻転生思想を可能にする自然宗教の精神風土においてであると言えます。その証拠に、ユダヤ＝キリスト教の経典である旧・新約聖書には、さまざまな奇蹟の話は出てきても、変身の話は殆ど出てこない。思い浮ぶ限りでは、神の言いつけに背き振り返ってソドムの町を見たために塩の柱に変身させられたという、

ロトの妻の話（創世記十九章）ぐらいではないでしょうか。イエスが行った奇蹟の内に、死者を蘇らせる話はあるにしても、変身の話はありません。変身は、啓示宗教の超越神が行う奇蹟としては何かしら相応しくないもの、という意識が働いているように思えます。輪廻転生の思想と、キリスト教の唱える魂の復活の思想とは、相容れない関係にあるらしい。変身は異教の神々に特有の業であって、それゆえキリスト教世界の成立により異教の神々がデーモンや悪魔へと変貌をとげるに従い、変身は専ら悪魔の業となっていきます。オヴィディウスのギリシア神話にあって変身が神々の特権であったとするなら、中世において変身は悪魔の特権となったわけです。近世初頭のヨーロッパでは魔女狩りがしばしば猖獗を極めました。この時宗教裁判官たちが魔女の悪行として挙げた項目の内に、サバトへの参加、空中飛翔、悪魔との契約と並んで、動物への変身があります。

中世の悪魔的変身物語の一例として、ファウスト伝説をとり上げてみましょう。「ファウスト」と言えばゲーテの作品（第一部1808年、第二部1832年）が有名ですが、これのもととなったのは十六世紀の民衆本「ファウスト博士の物語」です。民衆本というのは、十五世紀半ばから印刷術の普及にともない民間に流布した廉価な小冊子で、内容は中世の伝説や説話、フランスの武勳詩や騎士道恋愛物語の翻案等、民衆のために易しく書かれた散文物語です。民衆本はのちの詩人・作家たちに豊富な題材を提供すると同時に、いずれもこんにちドイツ人の血肉となり常識となっている話です。有名なものとしては「ファウスト博士」のほかに、「ティル・オイレンシュピーゲル」、「トリスタン」、「タンホイザー」等があります。

ファウスト伝説のもととなったのは、十五世紀末から十六世紀にかけて実在していた、ヴェッテンベルク生れのゲオルク・ないしヨー

ハン・ファウストという人物で、魔術師を自称するペテン師の大酒のみで、1540年頃アルコール中毒で死んだもようです。死後彼は悪魔と取引のあった人物として急速に伝説化され、1578年にはこれら伝説を材料に首尾一貫したファウストの生涯の物語が出版され、これが大当りを取り版を重ねました。このファウスト本によると、主人公は才能に恵まれた神学生でまもなく神学博士となりますが、同時に数学・医学・占星術・魔術をも究め、次第に悪の道に走り、或晩悪魔を呼び出し、24年間悪魔の奉仕を受ける代りに死後は魂を悪魔に委ねるといふ契約を結び、血で署名します。ファウストは悪魔の助力による奇蹟で人々を驚かせ、快楽的な生活を送りますが、結局24年後には契約どおり悪魔に魂を奪われ、悲惨な最期をとげます。

ところで、この民衆本「ファウスト博士の物語」が悪魔と魔術のテーマを扱っていないが、そこにこれといった変身の例が出てこないのは、この作者が無名のプロテスタント作家で、悪魔や魔術に接近することへの警告の意を込めて、教訓的な目的からこの作品を書いていることと関係があると思われます。変身は、ファウストが悪魔の助力を得て行う魔術としてすらあまりに非現実的であると思えたのかもしれませんが。変身のテーマは、キリスト教には馴染まなかったのです。

そこへいくと、のちにファウスト伝説を取り上げたゲーテは偉大な異教徒だったからでしょうか、自作の「ファウスト」では変身のテーマを大幅に採り入れています。メフィストフェレスは^巨大に姿を変えてファウストに近づき、ファウストはメフィストフェレスの助力で若返りますが、この若返りも変身の一つと見做していいでしょう。これらすべてが魔術によってなされるのであり、古代世界にあって神々の輝かしい特権であった変身は、ヨーロッパ中世世界にあって悪魔の業である魔術へと貶められてしまったわけで、このこ

とは、古代の錬金術や占星術が教会により魔術として排斥されるに至る過程と似ています。もっとも、ひとくちに魔術といってもピンからキリまであって、錬金術や占星術、これと結びついたオカルト学や神秘思想といった高級魔術は、中世を通じ変ることなく知的エリートたちの関心事でした。この種の魔術にはいつでも異教思想や異端思想が大量に流れ込んでおり、それゆえ中世や近世にあっては教会から胡散臭い目で見られ、近代にあってはデカルトに始まる近代合理主義思想のもとで影が薄くなっていましたが、二十世紀に至り近代思想の行詰りが自覚されてくるにつれ、次第に見直されるようになりました。神秘思想と結びついた高級魔術とは別に、俗信や迷信と結びついた魔術もまた民衆の間に深く根を張っていたのであり、これは、キリスト教も民衆の意識の深層にある異教的なものを完全に滅ぼすことはできなかったということです。

4

十八世紀に興った実証主義的な科学精神はやがて時代を支配するに至り、十九世紀には所謂近代リアリズム小説の全盛を見ることとなります。リアリズム小説については種々の見方・定義がありましようが、ここでは一応リアリズムを、近代の実証主義的科学精神に基づく芸術家の態度と考えておきましょう。つまり作品の真実味(リアリティ)を保証するものは、厳密に辿られた自然の因果律であるという考え方であり、この場合「自然の因果律」なる言葉の意味するものは、超自然的な奇蹟を排除する閉ざされた科学的自然観です。もちろん十九世紀においても、偉大な作家たちは誰しも多かれ少なかれこうした窮屈な自然観を超えたところで仕事していたわけで、このことはバルザックやドストエフスキーの作品を思い浮べるだけで十分明かです

が、それでもやはり、十九世紀の作家たちはどこかで時代の科学精神に繋がれ、この束縛を受けていたのであって、またこれが時代の要請でもありました。

十九世紀に先立つ十八世紀は、科学精神の洗礼を受けた自然が人々の前に新たな姿をもって立ち現われた時代、人々がこの科学精神による自然の再発見に夢中で没頭していった時代であると言えます。よい例がダニエル・デフォーの「ロビンソン・クルーソー」で、無人島に漂着した主人公の生活はその毎日毎日が戦いの連続であり、いかなる伝奇小説も及ばぬほどのドラマと冒険に満ち満ちています。

このことは、ルネサンス以後進行したヨーロッパ精神風土の世俗化とも関係があります。この頃のヨーロッパでは、人々は異教的な変身はもちろんのこと、キリスト教的な奇蹟すらも実際に生起しうるとは信じられなくなっていた。変身はキリスト教の到来と共に超自然的なありえない現象とされたわけですが、この意識は科学的思考の確立と共に近代においてますます確たるものとなりました。スウィフトの「ガリヴァー旅行記」が世に出たのは、「ロビンソン・クルーソー」に遅れること7年の1726年です。ここには小人国とか大人国、空飛ぶラプチュタ国とか馬の住むフウイヌム国といった奇想天外な舞台設定が見られますが、作者はこれを自らの思想展開のための寓意的文学手法として使用しているにすぎない。精神の世俗性と作品のリアリズムの上で、スウィフトはデフォーにいささかもひけをとりません。同じことはほぼ同時代のフランス作家ヴォルテールの寓意的哲学小説についても言えます。

ところが十八世紀末に至り、実証的科学精神が勝利を占め、文学上ではリアリズムが全盛期を迎えようとしていたまさにその頃、これら潮流への反動が立ち現われ、十九世紀の文学はこの反動をも巻き込んだかたちで展開

してゆく結果、はなはだ複雑な様相を呈することとなります。この反動とは、先ずドイツに興り、次いでイギリス、フランスに波及したロマン主義の運動です。先に、キリスト教の到来によって神々の座を逐われた自然の精霊たちは、魔術の内に、あるいは魔術と近い関係にある民話や伝説の内に生き続けたと言いましたが、これら民話・伝説に光を当て、一人前の文学に引き上げたのがドイツ・ロマン派の運動です。

ロマン主義は文学のみに限られた運動ではなく、哲学・歴史学・民俗学等の学問分野、音楽・美術・演劇等の芸術分野をも捉えた幅広い文化運動であり、それゆえ国によりさまざまな形態をとりましたが、ここではとりあえずロマン主義とは、規則的・形式的な文化のあり方に対するアンチ・テーゼであった、と言っておきましょう。演劇を例にとるならば、ギリシア劇以来の三一一致の法則を遵守しようとする古典主義戯曲に抗して、場所も時も自由なシェイクスピア劇の作劇術を舞台に復活させたのは、ロマン派の作家たちです。彼らは静的なものに抗して動的なものを、安定に抗して不安を、確定的なものに抗して不確定的なものをめざしたわけですが、これは彼らなりの自我の追求の不可避の結果でもありました。相対的に見て、フランス・ロマン派の場合、先行する芸術様式である古典主義への反逆という要素が強いものに対して、ドイツ・ロマン派の場合、合理主義への反逆という要素が強いようです。夢や狂気への関心が顕著なもの、ドイツ・ロマン派の特徴です。

さらにロマン主義の大きな特徴は、これがナショナリズムの運動であったことです。ロマン派は自我の追求であったと同時に、国民的アイデンティティの追求でもありました。彼らは自国の過去、とりわけ中世に憧れ、自国の伝統の発掘に努めました。歴史学・民俗学への関心が高まり、民謡・民話・伝説の蒐集が活発に行われるようになりました。これ

ら民間伝承の内に、国民精神の淵源が求められたわけです。その成果のひとつが、ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟による有名な童話集「子供と家庭のお伽噺集」です。フォークロアの学問的研究はヤーコプ・グリムをもって嚆矢としますが、彼の創始した学派を神話学派と称します。ヤーコプ・グリムは、これら昔話の内に古代ゲルマン神話の残滓と反映を見ることができると信じたのでした。

概してドイツ・ロマン派の詩人たちは、童話（あるいは昔話、お伽噺。Märchen の訳）こそ最高の文学ジャンルだと考えていました。因果律に縛られない物語の自由な展開、卑近な日常を超えた古めかしい道具立て、これらが彼らの空想に自由な飛翔を許したからです。ノヴァーリスの「青い花」、ティークの「金髪のエックベルト」、フーケの「ウンディーネ（水妖記）」、シャミッソーの「影を失くした男」等、ドイツ・ロマン派の代表的な散文作品はいずれも童話のかたちをとっています。童話といっても、これらは、専ら大人の読物として書かれたものであって、子供のための読物という意識はこれら作家たちには全くありません。この種の童話を民間伝承の童話 Volksmärchen と区別して、創作童話 Kunstmärchen と言います。フォークロアの有する奥深い意味を開示し、童話という文学ジャンルを復権させたことは、ドイツ・ロマン派の大きな貢献のひとつです。

近代リアリズム小説の中では自らの場所を見出しえなかった変身のテーマが、フォルクスタタとクンストたるを問わず、メールヒェンの中にはふんだんに出てきます。民話の研究はこんにち非常に進んでいて、世界中の民話がさまざまなパターンに分類されていますが、ここではそうした学問的な分類とは関係なく、幾つか変身の問題に触れておきます。

いたって頻繁に見られるのは魔法がらみの変身の話です。悪い魔法使いによって動物に変身させられていた王子や王女が、何らかの

有徳の人物の働きにより、あるいは自らの徳によって、もとの姿に戻るというもので、グリム童話の「蛙の王様」、「十二人兄弟」、「鳴きながらはねる雲雀」等、またコクトーの映画で有名なフランス民話「美女と野獣」がそうです。

この種の話の変形として、「シンデレラ」、「鶯鳥飼いの女」等のように、卑しい身分に身をやつしている少女が、その徳により真価を認められて王子と結婚する、という話があります。ここでは主人公の文字どおりの変身は起こらず、超自然的要素はかなり弱まっています。この傾向をさらに推し進めたものがアンデルセンの「みにくいあひるの子」で、ここでは民話の変身物語が換骨奪胎され、魔法的要素が完全に取り除かれるとともに、内面的な一段の深まりが感じられます。アンデルセンは民間伝承の再話から出発して次第に創作童話へと赴いた作家で、ドイツ・ロマン派に始まる創作童話の流れは、アンデルセンに至ってひとつの頂点に達したと言っていいでしょう。ドイツ・ロマン派の創作童話と違い、アンデルセンの童話は、大人にも子供にもそれなりに面白く読めるようにできています。このことは彼の代表的な変身物語「人魚姫」を見ても分かります。人間の王子に恋した人魚が海の魔女に頼んで人間に変身させてもらい、王子に近づきますが、しかしこの変身のために人魚は非常に大きな代償を払わねばならない。彼女にとっては変身後の一刻一刻が文字どおり苦しみの連続となりますが、それほど苦しみにもかかわらず結局思いをとげることができず、海の泡と化してしまうという悲しい話です。これは誰も子供の頃一度は読むか聞くかした話ですが、同時にここには人生経験を積んだ大人の鑑賞にも十分耐える深さがあります。トーマス・マンはその長編「ファウスト博士」で、この話を非常にうまく使用しています。

以上、ドイツ・ロマン派による童話の発見

により、変身のテーマが再度文学に登場したことを述べてきたわけですが、しかしこの変身の復活も、童話の世界以上にはあまり出なかったようです。ドイツ・ロマン派が提起したその他のテーマ、例えば分身 Doppelgänger のテーマ、狂気のテーマ、自動人形のテーマ、魔術のテーマ等（これらはいずれも多かれ少なかれホフマンの名と結びついたものですが）は遙かに生産的で、のちの作家たちによりしばしば採り上げられますが、変身のテーマはどうもあまり採り上げられた気配がない。冒頭でも触れましたとおり、十九世紀以後文学の世界で外的な変身が殆どとり上げられなくなったのは、大方の関心が圧倒的に内的な変身へと移ってしまったからでしょう。その意味で逆説的なのは、スティーヴンソンの「ジークル博士とハイド氏」の例です。

この有名な小説は十九世紀において外的な変身を物語る数少い例のひとつであり、内容は所謂二重人格のテーマを扱っています。一人の人間の内に潜む善悪二元性のテーマは、

中世以来悪魔との契約による人間の転落のテーマ、人間の内なる悪のテーマ、人間の罪深さのテーマとして度々採り上げられてきたもので、とりわけ新しいものではありません。この作品の新しさは、主人公の内的変化が同時に外的変身を惹起こすことにあります。二重人格のテーマだけならばなにも変身という超自然的現象を導入する必要はないわけで、ジークル博士の内部における善悪の意識の葛藤というテーマは、純リアリズムの手法によっても十分扱うことが可能でしょう。この内的葛藤を外的な変身によって表現したことが、十九世紀も末にあっては一種の先祖返りだったのであり、これに読者は新鮮な驚きを覚えたのでした。同じことは、二十世紀の作品であるカフカの「変身」についても言えます。

以上、西洋文学における変身のテーマについて、ヨーロッパ精神史との関連において考察してみました。（平成五年度前期総合科目「人間と文化」での講義に加筆したもの）

“Métamorphose” dans la littérature européenne

AOYAMA Taro

Dans les “Métamorphoses” d’Ovide les dieux ont le privilège de métamorphoser et de se métamorphoser. La métamorphose est possible autant qu’est assurée la métempsycose, dont la doctrine remonte jusqu’au pythagorisme.

Dans “l’Ane d’or ou les Métamorphoses” d’Apulée, le héros se métamorphose par magie. C’est que le monde de “l’Ane d’or” (le deuxième siècle) est celui du désordre religieux où “le Grand Pan est mort” mais le Dieu unique et intolérant n’apparaît pas encore.

Le climat spirituel de l’Europe subit un grand changement à mesure que le monde évolue de l’antiquité au moyen âge. Les dieux antiques sont chassés des trônes et obligés de survivre clandestinement sous le règne du christianisme en se déguisant en esprits ou en démons dans diverses traditions populaires. Comme l’église a condamné la doctrine de métempsycose, les métamorphoses deviennent extrêmement rares dans la littérature européenne. La métamorphose, jadis privilège des dieux, devient privilège du démon.

Chassant les esprits de la nature, le christianisme l’a tuée et mécanisée. Il a préparé ainsi le climat spirituel favorable au développement de la science moderne. Le réalisme littéraire du dix-neuvième siècle est basé sur l’idée de causalité conçue par la science moderne positive et rationnelle.

Mais la fertilité de cette littérature au dix-neuvième siècle consiste en ce que l’esprit positif et rationnelle ne l’a pas complètement étouffée. Un des coups contre l’esprit moderne vient des romantiques allemands. Le romantisme est un mouvement nationaliste cherchant à faire revivre les esprits traditionnels et nationaux. Un des fruits de cette recherche est la collecte du folklore. Dans des contes populaires ne se trouvent pas mal de motifs littéraires qui étaient persécutés par le christianisme et la science moderne. On compte parmi eux le motif de métamorphose.

Les contes de Grimm abondent de métamorphoses par magie. Au dix-neuvième siècle, c’est surtout des auteurs de contes de fées qui ont recours à ce motif, mais Robert Louis Stevenson obtient dans son récit “Docteur Jekyll et M. Hyde” un effet inopiné et heureux en adoptant ce motif pour un sujet sérieux et tragique.